

## 世界のために、未来のために

立命館守山高等学校 2年 村瀬 稚奈

「自然の力で人を救う科学者になりたい。」

これは小学校の低学年の頃から持ち続けている私の夢である。きっかけは、世界の水事情について父から話を聞いたことにある。水を出しっ放しにしていた私に父は言ったのだ。「日本では蛇口をひねれば浄化された水が出てくるが、世界には水を汲みに行くために何時間も歩き、そのために学校へ通うこともできない子どもたちがいる。汚染された水が原因で病気になったり、命を落とす人も多い。」そんな話を聞いて、幼いながらも強い衝撃を受けたことを今でも覚えている。

それ以来、私は環境問題に強い関心を抱くようになった。中学の時は、大学のイベントに参加し、琵琶湖の水質調査を手伝ったり、水中に生息するプランクトンや水辺の昆虫等を採取した。着なくなった服を集めて企業に送ったり、琵琶湖周辺のゴミを拾う活動にも参加した。中学3年生の時にはフィリピンのオンラインツアーに参加し、初めてゴミ山のことを知った。当時はコロナ禍でタブレットの画面を通してしかゴミ山を見ることができなかったが、高く積まれたゴミの山が広がっている光景に私は驚いた。このツアーではゴミ山に住む人々がゴミの中に芋を植えて、育てて食料にしているということも紹介され、私は自由研究で生ゴミや、プラスチック、アルミ等が混じった土で、植物の成長にどのような違いが見られるかを半年にわたって観察した。高校1年の夏休みには琵琶湖を一周し、事前に決めておいた8カ所から水辺の土砂を採取して、pHやリン、硝酸態窒素の含有量を調べ、地域の産業地図と照らし合わせ、各地域における土壌の富栄養化の原因を考察したこともあった。

初めてゴミ山を知った日から2年経った高校2年の夏休み、遂にゴミ山をこの目で見る機会が訪れた。アフリカ、ケニアの研修ツアー

に参加することができたのである。シカという地区のゴミ山に着いてバスから一步降りたその瞬間、強烈な異臭に私の嗅覚は完全にノックアウトされた。辺り一面のゴミ、ゴミ、ゴミ。2年前にもゴミ山は見たはずだった。しかし、実際に目の当たりにした光景は画面で見たものとはあまりにもかけ離れていた。言葉を発することもできないまま、小1時間ほど歩くうち、次第に私の心に怒りが沸いてきた。(私は今まで何をしてきたのか。世界の現実を知ったかぶりして「自然の力で人を救う科学者になりたい。」などと語っていたなんて…)自分の無知を恥じ、自分の傲慢さや非力さに腹が立ってしかたなかった。

その2日後、ケニア滞在中に私は高熱を出し寝込んだ。幸いにも私は快適なホテルの一室で引率の先生やツアーガイドの方々に看病してもらい、病院に連れてってもらい、薬を処方してもらって、3日後には快復することができた。しかし、数日前に見たゴミ山で暮らす人々は病院に行ったり、薬を買うことはできない。数千円もあれば助かる命が今も世界のどこかで失われていく。

では、「人を救う」というのは、その数千円を出してあげることなのだろうか？

確かにお金で救える命はあるだろう。しかし、それは対処療法であって根本的な解決策ではない。かの中村哲氏も言っていたではないか。「百の診療所より一本の用水路を」と。中村氏は人々を救うために用水路を作った。ならば、今、私にできることは何だろう？夢を語っているだけではダメなのだ。もっと現実を知らなければ。問題を解決するために、何かをあげる、そんな簡単なことではない。一方的な施し型の援助ではなく、現地の人々と共に、その地域に合った方法で問題を解決することが大切だ。そのために私は様々な知識を身につけ、その知識で世界中の人々を、未来を、照らしたいと思う。世界からゴミとか汚染とか言われるものが消え、誰もが幸せだと思える日々を現実にするために私は自然の力で人を救う科学者になりたい。